和漢脩身書

河村與一郎編輯

卷五

71
259

大日本教育會書籍館
新書門
一八函
一架
四號
一〇冊
館
易
冊

K 110.1
39
5

田中芳男閲正　河村與一郎編輯
櫻戸玉緒校字

和漢修身書

版權免許

文求堂藏版

詩經

和漢修身書卷五

田中芳男閲正　河村與一郎編輯
櫻戸玉緒校字

第一章

○父ふくば。何を怙まん。母なくば。何を恃まん。出てゝ則恤を銜み。入まゞ則至る靡し。父や我を生ゝ。母や我を鞠る。我を拊で。我を畜ふ。我を長じ。我を顧

禮記

み。我を復し。出入我を腹く。之ふ德を報いんと欲をまごも。昊天極り罔し。

孔子家語

○父母沒ひしいへども。將ふ善を為んとをれど。父母の令名を遺さんこと。我念ふく。必ず果を。將に不善をなけんとすまど。父母の羞辱をのこさんこを思ふて。必ず果さび。

○樹靜まんと欲すまども。風停まらび。子養いんと欲をれども。親待たず。往て來らざる者を年まる。再び見るべからざる者い親ふり。

中江藤樹訓

○親と此身を養ひたまふ恩ふり。親なけまば。此身まし。君ふけまど。これ身の養ひふし。皆命を保ち恩ひるゆゑふ。親にも君ふと。命と棄て。奉公をる道理ふり。

全

貝原篤信訓

○孝德の本然を悟り得ざるときは。博學多才ふりとて。真實の儒者ふあるべきぞ。まして愚不肖を。禽獸ふ近き人なるべし。

○人の身を。父母を本とし。天地を始めとして。天地父母の惠をうけて生れ。又養はれまもる我身なれば。わが私の物ふ非ぞ。天地のみたまもて。父母の遺せる身

全

なれば。謹て善く養ひて。毀なひ傷らじ。天年を長く保つべし。

○人の子ふりとて。其親を養ふ道を。よくざるべくば。其心を樂ましめ。其心に背かぬ。怒らしめず。憂ひしめじ。其時の寒暑ふ隨ひ。其居室を。其寢所を安くし。其飲食を味よくして。誠を以て。やしなふべし。

○兄弟を分形連氣の人ふり。其幼あるに方り。父母左提右携。前襟後裾。食を則チ案を同くし。衣ハ則チ傳ヘ服し。學ハ則チ業を連ね。遊ふを則チ方を共ふし。惟悖亂の人あるとも。相愛せざる能ハざ。其壯ふ及び。各其妻を妻とし。各其子を子とし。篤厚の人有といへども。少く衰へざる能ハざ。娣姒を兄弟ふ比をれむ。則チ

疎薄ふを。今疎薄の人をして。親厚の恩を節量せしむるを。猶方底にして圓蓋ふる如く。必合ハず。惟友悌深至り。傍人の為移されざる者免んか。

○五常の中。朋友一に居ふ。以て仁を輔る所。以て益を資る所。情の相好をる。弟の若く。昆の若く。氣の相投ぜる。芝の如く。蘭の如し。我德を勸め。我過を箴し

論語

め。我愚を啓き。我惰を儆しむ。難あるに相恤み。疾あるに相扶け。背ふ非毀をる勿れ。面ふ諛を加ふる勿れ。

○益者三友。損者三友。直を友とし。諒を友とし。多聞を友とするを益ふり。便辟を友とし。善柔を友とし。便佞を友とするを損なり。

童子訓

○子弟を教ふる。先其交はる所の友を擇ぶを。要とすべし。其子の生質よく。父の教正しくとも。放逸無頼の小人に交はるを。其と往來をれば。必彼ふ引をふ。ふつきて惡くふる。況や其子の生質よりもさらにおとるや。古人の詞ふ。年少子弟。たとひ終年書を讀ぶとも。一日小人に交るべからずといへり。一年書を讀ぶふ。甚だ可けれども。猶ホ惡きをまぬかるるも。一日

小人ハ交ハるを。たのしとする事。

第二章

○恭にして敬あれど。以て勇と攝すべし。寛ふして正なるべ。以て強を懐くべし。愛ふて恕あるべ。以て困を容づし。温にして斷ふ裕バ。以て姦を抑ふだし。

○強あるべども。達せど。勞せどれど。功なく。忠ふらどれバ。親なく。信あるべども

バ。復をる無く。恭ならばまバ。禮を失ふ。

○君子富めど。好んで其德を行ひ。小人富めど。以て其力ふ適ひ。淵深して魚之に生じ。山深して獸之ふ往き。人富て仁義附く。

○敬して而後能誠あり。敬ふ非ざれど。則以て誠となるふし。氣の決驟奔駟に軼ぐ。敬い則其衝轡あり。情の横放潰川

よりて甚し。敬を則其隄防あり。學者倘是に於て。勉むるを知り。思慮の未萌を戒し。事物の既接ふ恭しく少くも間斷ふけれど。則德全くして。欲泯びん。

○博愛を仁といふ。行ふ之を宜しきを義と謂ふ。是ふ由て焉に之くを道といふ。己に足て外ふ待らずして之を德といふ。

○凡人の性。仁よりも貴きは莫く。智より急なるはなし。仁以て質とし。智以て之を行ふ。兩者を本として。之に加ふるふ。勇力辯慧。捷疾劬祿。巧敏遲利。聰明審察を以てして。衆益を盡す。

○士卑隱ふ處て。上達せんと欲されど。必先諸己に反を。上達をふ道なり。名譽起ざるを。上達を能はず。譽を取

牧民忠告

不道あり。友不信ぜらるべきなれば。譽を得る能はず。友に信ぜらるゝ不道あり。親に事つゝ。説びらるべきなれば。友に信ぜらるべし。親に説びらるゝ不道あり。身を脩めゝ。誠あるゝなれば。親に事ふる能はず。身を誠あるゝ不道あり。心專一あるゝなれば。專誠あれば能はず。

○赤子の生。知識なるなし。然ども之ぞ

宋程伊川答張載書

母たる者。常不意不先だち。其所欲を得。其理他なし。誠然るのみ。誠を愛不生じ。愛ハ智に生ず。惟其誠あり。故に愛周らざるなし。惟其愛あり。故不智及ばざるなし。

○人情發し易し。而ども制し難き者。惟怒を甚しとす。第能怒の于を時。遽不其怒を忘れて。理の是非を觀ず。亦外誘の

元趙良弼説

惡むふ。足らざるを見るべし。而して道ふ子て。亦思ヒ半ふ過ん。

○人性發し易くして。制し難き者惟怒を甚しとし。必ス己レに克て。然後以て怒を制をべし。必ス理ふ順ふて。然後以て怒を忘るべし。惟恐び難き所を恐び。容れ難き所を容まで。事斯ふ濟ふ。

第三章

近思録

○冠昏喪祭い。禮の大なる者。今人都て理會せず。豺獺も皆本ふ報ぞるを知る。今士太夫の家。多く此を忽ふし。奉養に厚くして。先祖ふ薄し。甚ず不可ふり。

慎思録

○子弟家ふ居てい。則チ父母に順ひ。兄弟に宜しく。親戚を敦くし。外ふ在てを。則チ泛く衆を愛し。仁ふ親しミ。凡ノ人倫に接まるふ。平心和氣。慈愛恭敬。忿を懲し。慾

家道訓

全

を望ぞ。自ら反して。己を責め。恐ぶあり容るゝなり。居常善と為すと以て樂とし。

○富貴の家ハ。貧賤なる親戚の。出入するも。主人の仁愛の厚さなるゝはきて。其家の面目とぞ。斯る人の來るを羞づ〳〵ぞ。

○朝蚤く起るを。家の榮ゆる驗なり。晏く起るも。家の衰ふる基ふり。朝早く起て事を勤むるを以て。身の業とし。家の務の業とし。見習ひ〳〵むべし。

全

○親戚朋友ハ。止むを得ずして。物を貸さば。初より與ふる心得にかぞべし。うれる時も喜ぶべき時過ぎさば。患を忘れて返さぞ。其時かゝる與へとふと心得ぬれば。憾なし。

○人の器物を。かるゝを好ぶべからず

全

び。人を妨ぐるふしと遠慮をづし。入用あることなるづきほどゝい。不自由と堪つゝ。人の器を借るづのゝぞ。若止を得ずして。器とかりむ。損ふぞかりぞ。用畢りむ。早く返をべゝ。

○無益の藝を好み。淫樂と好み。衣服と飾を好ゝ。美味と好ゝ。饗應を好ゝ。營作と好み。無用の器と好む。此の如く好多

全

きい。即是禍と好むなり。

○下人利口にゝく。我心ふ稱ひたりとも。愛と過ひづのりぞ。愛過まば。必驕怠たりて。家法を亂し。私と行ひて。主人の禍となり。其身も亡ぶ。

○奴婢ふ罪あることを怒憎むと過をべかゝぶ。憎み過せば。必怨背きて。禍とふる。愛も憎えきほどあるべゝ。

性理大全

産語

第四章

○地方の物を生ずるハ大數あり。人力の物を成すに大限あり。之を取るハ度あり。之を用ふるハ節あるべ。則常に足る。之を取るに度なく。之を用ふるハ節ふけるべ。則常ハ足らず。物の豊歉ハ天に由る。物を用ふるハ多少ハ人ハ由る。

○人以て恒産無かるべし。夫既に

全

恒産なくば。以て其産を保つ所以を知ざるべからず。何を以て其産を保つ。同く用を節ハ保つ。節とハ之ハ限を為すなり。竹に節ありて越づ。木ハ節なりて折べし。節とハ止まて。過ハを得ざるを謂ふ。

○錙銖を以て微なりとして。之を軽んずる者ハ。生を治むる能ハず。小善を以

中興鑑言

て。行ふ足らぬとする者ハ。德を成す能ハず。

○窮して後ふ。法を作る者そ。巧なるべしいつゝも益弊る。亦盍ぞ其本ふ反らざる。夫欲そ猶漏卮の如し。之ゞ釁と塞がざれぞ。終日沃で盈ると見ず。

家道訓

○人若富貴ふして。財を多く畜ハヘ持たゞ。是天ふ対する我一人に。厚くしぬふに非ぞ。多く人を救ハ〜めん為ふ。我に授けぬふと思ひて。天命ふ遵ひて。常ふ仁愛の心を持て。貧苦ふる人を惠こ。飢饉ふる者と救ひて。善と行ふと以て。樂こととゝ〜。

全

○財を多く持てゝ。わが身獨の奉養ふ侈り。人ふ施さゞして。善と行はざるも。無用の物ふり。石瓦を多く持るふ同じ。

全

○富で財贏りなる人そ。天道盈るを闕く理なれど。人ふ施さゞして財を多く聚めおくのゝ。後ハ必ス災來たりて。財と失ふひ。子孫ふ其財を遺し難し。

第五章

禮記

○君子ハ其服を服をゝゞそ。其容あるさと恥ツ。其容なきゝゞも。其辭なきさと恥ツ。其辭あれども。其德あるさと恥ツ。其德あるゝゞも。其行あるさを恥ツ。

荀子

明田藝積說

○君子ハ不羞と恥て。汚さるゝを恥ぢず。不信を恥て。信ぜられざると恥ぢず。不能と恥て。用ひらるゝを恥ぢず。

○善富める者ハ。德の積ざるを羞て。金の積ぢるを羞ぢず。善貴き者ハ。德の夥かゝらざると恥て。祿の夥かゝらざるを羞ぢず。

○實なくして名を得る者は恥づべきの甚だしきなり。偶然一時之を得るといへども終ふ亦必ず亡びんのみ。喜ぶべき所にあらず。

○學者は須く仁を以て心に存し。毎日人を利する事を做すを要むべし。人の知と不知とを管せず。之を稱して陰德とす。

○心ふ仁をたもち身に善を行ひて其善を人の知ることを求めざるを陰德といふ。貧人も其力ふ應じて善を行ふべし。

○人に存する者眸子より良きい莫し。眸子は其惡を掩ふ能はず。胸中正しければ則眸子瞭ふり。胸中正しからざれば則眸子眊し。

說苑

○祥を福の先ある者なり。祥を見て不善を為せば。則福生ぜず。殃も禍の先ある者なり。殃を見て能く善をなせば。則禍至らず。

孔子家語

○君子に三恕あり。君有りても事に仕へ能はず。臣たりて其使ふを求むるを恕に非ず。親あれども孝ある能はず。子たりて其報を求むるは恕に非ず。兄有りても敬ある能はず。弟ありて其順ある

淮南子

を求むるを恕に非ず。

○天下に三危あり。德少くして寵多き。一の危きなり。才下くして位高きは。二の危きなり。身大功なくして厚祿あるは。三の危きなり。故に物或は之を損じて益し。或は之を益して損ず。

從政名言

○人の處し難きは。處ある者を正に必

説苑

しも聲色を勵まして之と是非を辨へ。長短を較ぶべし。惟自修ふ謹しこ愈謙に愈約ふせざ。彼將自ら服せん。服せざる者ハ妄人。又何ぞ校せん。

○德行廣大にして守るふ恭を以てする者ハ榮ゆ。土地博裕ふして守るに儉を以てする者ハ安し。禄位尊盛ふして守るふ愚を以てする者ハ益ひ博聞多

初學訓

記にして守るふ淺を以てする者ハ廣し。

○人を知るも至て難けれども。己を知るを人を知るよりも猶難しといつり。故ふ古人を人を知る之を知と謂ひ自ら知る之を明といつふ。明を知より勝れるを人の心をかくれて表より見えず。故に知り難きハ宜なり。我心ハ内

言德録何垣語

にあらず。自ら知易かるべし。却て知ること難きハ何ぞや。我身ふを私なりて己れとひいきして許を故に。惡きことを善と思ふあるなり。

第六章

○剛直人と居るハ。心ふ畏憚をる所ふり。故ふ言必擇び。行必謹しむ。初め相安んぜざる若くふまどを久こけれど益

伸長子昌言

ある多し。柔善人と居まば。意ふ和意と覺ふ。然而言ハ必予を贊けるなるを。過ちなるも予と警むる莫し。日々相親好し尤悔と身ふ積こ。自ら知らず。損孰まこう焉より大なるべん。

○幽言にこそ。則己の短を攻め。會同ふこそ。則人の長を述ぶ。我ふ負く者ハ。我厚を加ふ。未だ人と交もる。此の如くして。憎

曾子

言德錄胡五峯語

まるをれもあらず。

○親戚まろこびざれば。敢て外ふ交はらざれ。近き者親しまざれば。敢て遠きを求めざ。小なる者審あらざれば。敢て大を言はざれ。

○能く人の實病を攻るも。至て難し。能く人の實攻を受るも。尤も難しとも。人能く我實病を攻め。我能人の實攻を受

孔子家語

程子語

く。朋友の義。其庶幾らんか。

○吾間以て人ふ與し。終日倦ざるべき者ハ。其惟學か。其容體觀るふ足らば。其勇力憚るふ足らず。其族姓道ふに足らず。終ふ大名以て四方ふ顯聞し。聲を後裔に流す者あるも。豈學者の効ふ非ずや。

○人多く子弟の輕俊を以て喜ぶべ

として其憂ふべきを知らず。輕俊の質ある者は。必ず教ふるに。經學に通ずるを以てし。本に近づかしめて。文辭の末習を以ひざる。則其偏質を矯め。其德成を復せしむる所以なり。

○上學は。神を以て聽き。中學は心を以て聽き。下學は。耳を以て聽く。耳に聽く者は。學皮膚に在り。心に聽く者は。學肌肉

にあり。神に聽く者は。學骨髓に在り。

○騏驥疾しといつても。伯樂に遇ざれば。千里を致さず。干將利なりといつても。人力に非ざれば。自斷ずる能はず。烏號の弓。良といつても。排檠を得ざれば。自任ずる能はず。人材高しといつても。學問を務めざれば。聖を致す能はず。水積て川を成せば。則蛟龍生じ。土積て山

徐幹以學篇

を成せむ。則豫樟生じ。學積で聖と成まで。富貴尊顯至る。

○學とも。以て神を疏し。思を達し。情を怡しめ。性と理むる所にして。聖人の上務あり。民の初載。其朦くして。未だ知らび。譬ば寶の元室ふ在て。求むる所あまども見えず。白日昭あれば。則群物斯ふ辨ずるが如し。學ハ心の白日なり。

和漢修身卷之五終

玉木正名書

版權免許

明治十五年十月七日
同十六年十月刻成發兌
定價八十錢

編輯者　京都府平民　河村與一郎
上京區第二十六組西三防堀川町五百九番地

出版人　京都府平民　田中治兵衛
下京區第五組寺町四條上ル文學寺七番戸

發兌人　大阪府平民　柳原喜兵衛
大阪東區北久太郎町四丁目十五番地

和漢脩身書

河村與一郎編輯

卷六

71
259

大日本教育會書籍館
一八函
一架
四號
一〇冊

新書門

冊

K110.1
219
2